



そらシリーズの今後の展望 (大豆多収新品種「そらシリーズ」に関するシンポジウム講演資料)

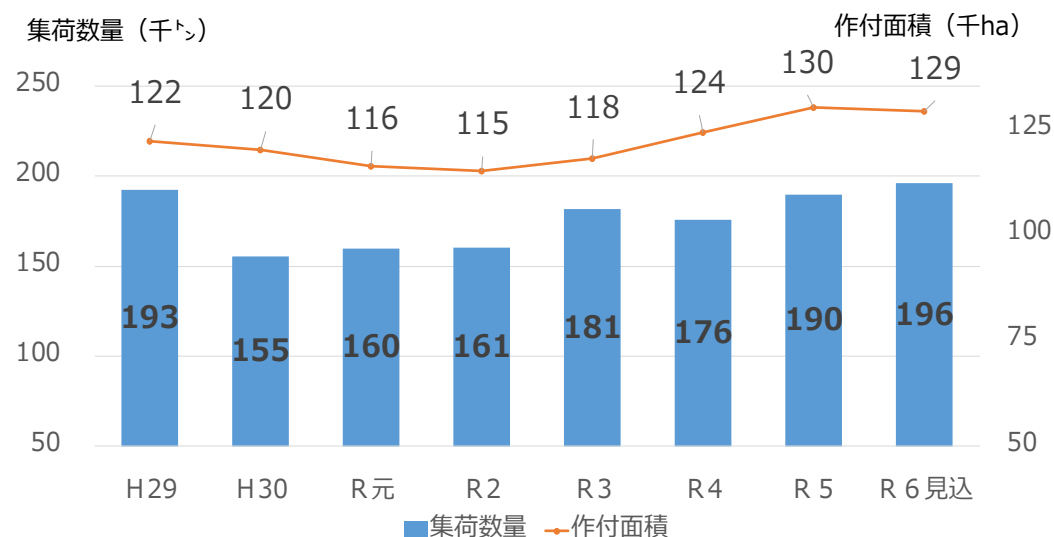
全国農業協同組合連合会 麦類農産部



1. 国産大豆の作付・生産状況

- ① 国産大豆の**作付**面積は、主食用米等からの転換により令和3年産以降増加傾向。6年産は前年差で1千ha減少したが、129千ha（前年比99%）となっています。
- ② 集荷数量は天候等による豊凶差が大きく、30年産から2年産までは3か年連続の不作となり、160千ト前後で推移。3年産以降は一部地区を除き単収が安定し、5年産は190千トまで増加。6年産は北海道が豊作ですが、西日本・九州地区を中心に播種遅れや播種後の高温干ばつによる生育不足、収穫期の高温による黄化・落葉遅れ等があり、196千ト（前年比103%）を見込んでいます。

【図表1】国産大豆の作付面積・集荷数量の推移（全農集荷分）



【図表2】国産大豆の5年産集荷結果と6年産集荷見込（全農集荷分）

地区	作付面積 (千ha)			集荷数量(千ト)		
	5年産実績	6年産見込	前年対比	5年産実績	6年産見込	前年対比
北海道	41	41	100%	73	82	112%
東日本	43	42	98%	52	59	113%
西日本	27	27	100%	31	29	94%
九州	19	18	95%	34	27	79%
合 計	130	129	99%	190	196	103%

※地区は、全農の集荷事業所単位

※四捨五入の関係で各地区の合算値と合計値が一致しないことがある

2. 国産大豆の販売・需給動向

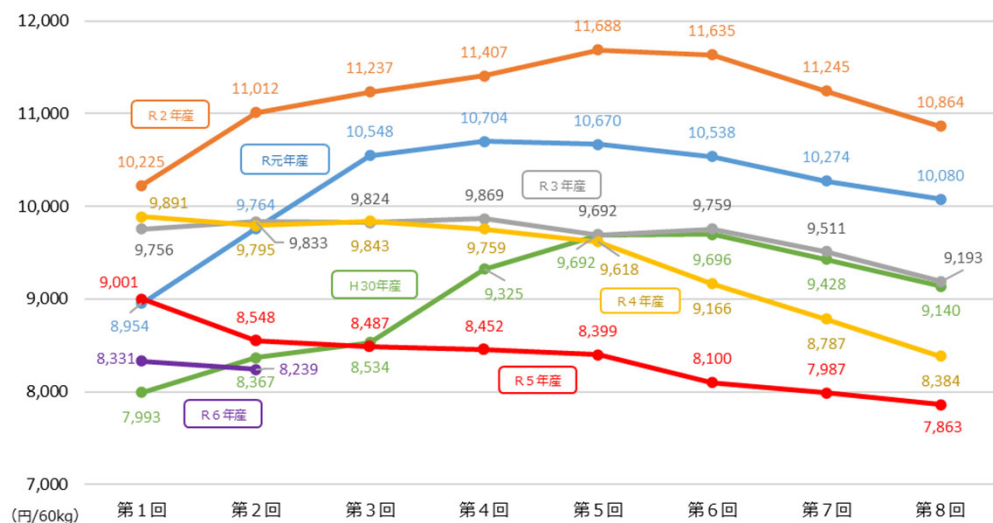
① 30年産から2年産まで不作が続く中、コロナ禍における輸入大豆の入港遅延の不安感で国産大豆の引き合いが強まったこと、その後も輸入大豆の価格高騰があり、国産大豆の価格が高値で推移しました。

② 3年産以降生産量が増加したこと、5年産の販売期中には停滞していた輸入大豆の入港が一気に進んだことから、国内の国産大豆及び輸入大豆の流通在庫が積み上がり、需給が緩和し、国産大豆の価格はコロナ禍前の水準に近い落ち着きとなっています。

(補足) 輸入大豆(食品用大豆)について、実需者の太宗は原料確保のために引取義務のある契約栽培を予め行っている。

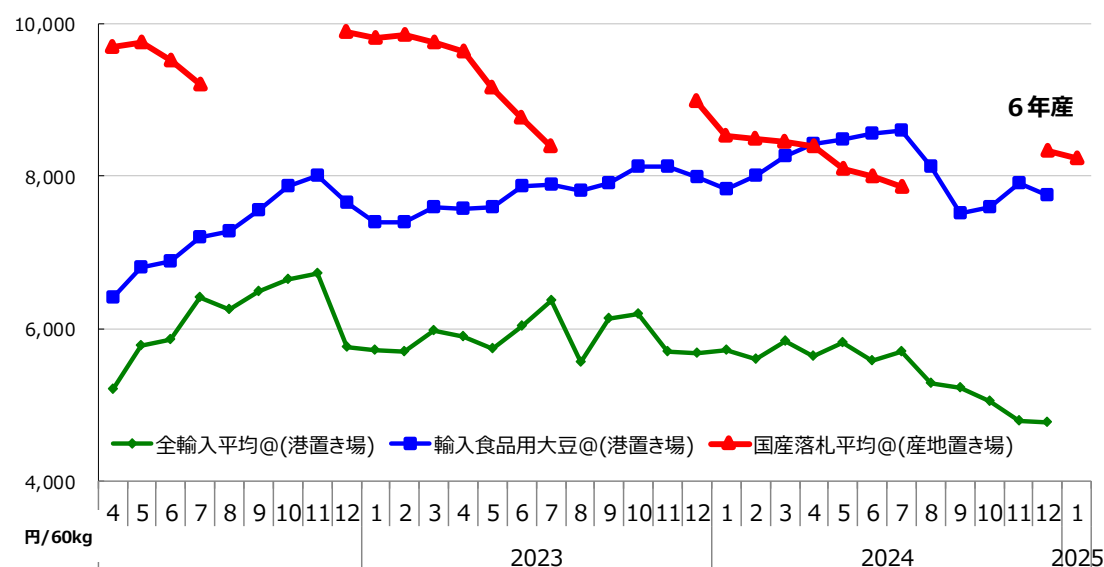
そのため、輸入大豆価格の高騰や使用量が計画通りに進まないという理由で、契約数量をキャンセルすることができない(国産大豆への切替が即座に難しい)。

【図表3】国産大豆の収穫後入札結果の推移



※6年産は第2回目までの結果

【図表4】国産大豆と輸入大豆の価格差



3. 国産大豆に求められるもの

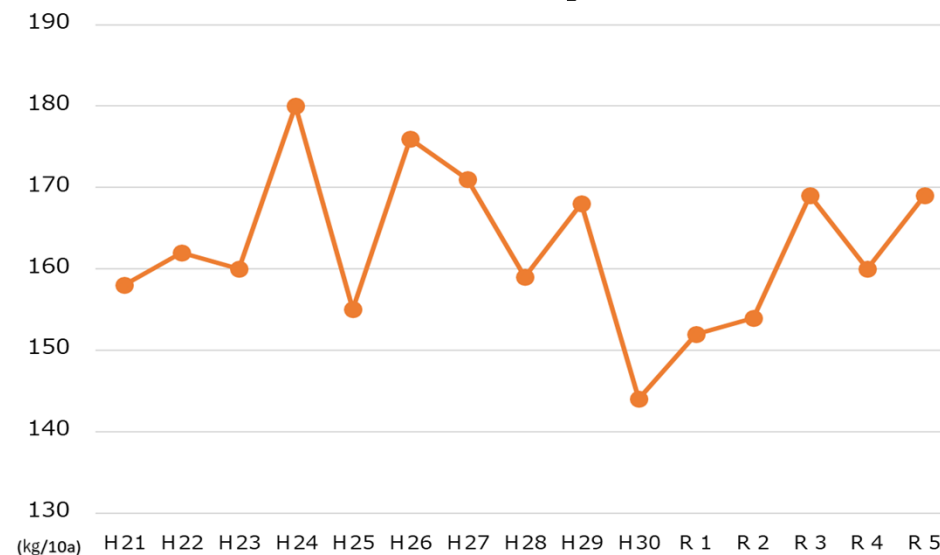
- ① 国の食料安全保障の観点から、輸入依存度の高い大豆の国内生産を増大することが必要とされています。
- ② 国内の大豆作付面積は、主食用米の需要動向等を受け、中長期的に増加傾向が続くと想定されます。
- ③ 国産大豆は天候等による豊凶差が大きく、数量・価格が不安定であり、特に数量面で、実需者への播種前等での事前提案のブレにつながるため、実需者の輸入大豆から国産大豆への積極的な切替への足かせとなっています。
- ④ このため、単収の向上・安定を進めることで、実需者への安定的な数量提案につなげることが、国産大豆需要拡大において、必要不可欠となります。

【図表5】用途別食品用大豆使用量と今後の需要動向
(農林水産省「大豆をめぐる事情」を基に作成)

単位：千トン

用途	使用量	うち 国産	国産 比率	今後の需要動向
豆腐	452	130	29%	国産使用の増加が見込まれる。
納豆	166	42	25%	消費者の健康志向により使用量増加。これに伴い国産使用の増加も見込まれる。
煮豆	27	20	72%	国産シェアは高いが使用量は横ばい。大粒で上位等級が求められる。
味噌	123	12	14%	使用量は減少傾向にあるが、一定の国産使用量の増加が期待される。
醤油	170	6	3%	脱脂大豆使用が多く、国産使用は限定的。
豆乳	66	11	14%	消費の回復・拡大が見込まれ、これに伴い国産使用量の増加が期待される。

【図表6】国産大豆の10aあたり収量kg（全国）の推移



※農水省「作物統計」より作成

4. 大豆多収新品種「そらシリーズ」の取組み状況

- ① 全農では、JA・産地の協力のもと、単収の向上・安定が期待される「そらシリーズ」について、6年産は12県（全農取扱予定分）での実証栽培を行いました。概ね各県の既存品種より多くの収量を確保できていることを確認しています。
- ② 加工適性について、加工メーカー・実需者の協力をいただき、加工試験を行っており、一定の評価をいただけています。

【図表7】6年産全農取扱い「そらシリーズ」の栽培産地

品種	宮城	山形	茨城	群馬	千葉	新潟	石川	愛知	三重	滋賀	島根	熊本
そらみずき			○	○	○					○	○	
そらみのり								○	○		○	○
そらひびき	○	○				○	○					
そらたかく									○	○	○	

【図表8】実需者加工試験の結果（6年度現在※抜粋）

実需者	既存品種との主な違い		本格的に流通 となった場合に 使用するか	特記事項 (△についての主なコメント)
	歩留まり	粒ぞろい		
豆腐・油揚げ (3社)	○～△	○～△	○	・ 粒ぞろい：粒径が小さく、かなり小さい粒径も混ざっているため、既存品種(大粒)より、豆乳収率(歩留まり)が低下
味噌	△	△	△	・ 歩留まり：吸水率が低い ・ 粒ぞろい：バラつきがあり煮えムラが出る可能性、白みそ向けは茶目だと使用できない
醤油	○	△	○	・ 粒度が中粒であれば、問題ないが、小粒は加工設備上対応できるか懸念あり
きなこ	○	○	△	・ 食味は甘味が少なく独特の味のため、用途によっては使用可
プラントベースフード	△	○	○	・ 脱皮加工の場合、小粒では歩留まりが悪くなると予想される

5. 大豆多収品種の今後の取扱いについて

① 生産面

- 7年産においても、引き続き栽培協力いただける産地の理解を求め、「そらシリーズ」の普及拡大を進めます。
(全農では全国で14県に種子供給を予定しています)
- また、「そらシリーズ」の生産に対して、種子手当や実証栽培にあたり必要な費用等への支援も検討していきます。

② 流通面（販売）

- 「そらシリーズ」の加工試験を各用途の実需者に引き続き行っていただき、その評価内容を産地等関係者へフィードバックしていきます。
- 実需者には、「そらシリーズ」の販売推進を行っていますが、将来的な奨励品種化も見据え、契約栽培取引につながるよう、営農継続と安定数量提案に努めてまいります。

➡ ただし、これらを進めるには、整理すべき課題もいくつかあります。

【図表9】「そらシリーズ」の全農による7年産用種子供給予定産地

品種	秋田	山形	茨城	千葉	新潟	長野	石川	岐阜	愛知	福井	滋賀	島根	徳島	熊本
そらみずき			○	○		新規		新規		新規	○			
そらみのり								新規	○		新規			○
そらひびき	新規	○			○		○	新規						
そらたかく											○	○	新規	新規

【図表10】「そらシリーズ」に対する各産地意見（全農聞き取り内容）

【メリットと感じたこと】

- 既存品種が天候不良で不作の中、収量が一定量確保できたことに期待
- 既存品種と栽培期間が異なるので、作期分散化の点で有用

【課題意見】

- 生産者・圃場によって収量の差異があったので、要因分析が必要
- 播種期の違いで収量に差が出たので、適期播種が重要
- （一部地区において）大豆後の小麦の播種期が遅くなる

5. 大豆多収品種と今後の取扱いについて

【図表 1 1】「そらシリーズ」の生産面・販売面における課題

課題事項	全農での対応方針
○ 種子生産・供給体制が十分に整っていないため、本格的な普及には時間がかかる。	⇒ 種子供給については、種子生産会社、農研機構と連携して、全農からの対応を継続していきます。 ⇒ 各県での奨励品種化への対応および種子の安定生産に向けて、栽培評価や実需者加工適性評価を継続的に支援していきます。
○ 既存品種に比べ粒径が小さく、普通銘柄で産地品種銘柄登録しても、現行の農産物検査規格においては「小粒その他」となり、産地品種銘柄を謳えないものが多く発生する可能性がある。	⇒ 産地品種銘柄となるよう、農水省等と連携した現地での目合わせ会の開催を継続して実施します。 ⇒ 農産物検査規格の課題・設定について、農水省と引き続き協議してまいります。
○ 「小粒その他」の規格でも、粒径のバラつきが大きいため、実需者に選んでももらえず、販売推進の影響が懸念される。	⇒ 実需者ニーズにあった粒径で販売提案・推進できるよう、産地段階での調製選別における最善な篩いサイズについて、関係者の指導を仰ぎながら設定検討していきます。
○ 実需者への販売提案・推進において、需要のある既存品種の作付減（既存品種から「そらシリーズ」への単純な作付切替）とのバランス。	⇒ 需要のある既存品種からの単純な作付切替ではなく、「そらシリーズ」としての需要確保・拡大を進めることで、大豆全体の作付面積が増やせるよう、産地・実需者と協議していきます。

6. その他(大豆・大豆食品の消費拡大の取組みについて)

【図表12】国産大豆商品プレゼントキャンペーンについて



2月3日は大豆の日

大豆の日には国産大豆を食べよう！

2025年1月30日(金)～2月16日(日)まで！

国産大豆商品プレゼント キャンペーン

Xフォロー&リポスト

古くから、日本の食文化に根付いている国産大豆。
近年では、栄養豊富なパワーフードとして大豆食品の注目度が増しています。
JA全農は、健康な食生活と日本の農業を応援します！

全農広報部 食農応援部 は、
こちらから！

抽選で**100名様に国産大豆
商品詰め合わせが当たる！**
1,000円相当

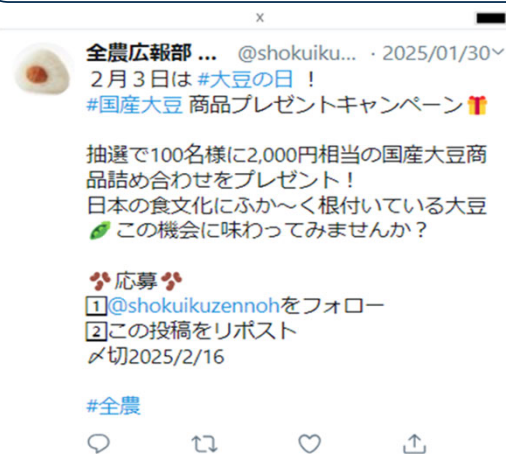
応募方法
全農広報部 食農応援部 (@shokuikuzennoh)を
フォローして、キャンペーンポストをリポスト

JAグループ
全国農業協同組合連合会

全農 JA全農

【お問い合わせ先】国産大豆振興・普及推進センター
〒100-8508 東京都千代田区千代田1-1-1 全農ビル 5F 総務課
TEL: 03-5561-1111(受付時間: 9:00～17:00) FAX: 03-5561-1112
Eメール: zen-japan@zen-japan.co.jp

- JA全農は、2月3日の「大豆の日」を契機に国産大豆の消費拡大を目指し、まずは国産大豆商品に関心を持っていただく・食べていただくことを目的としてキャンペーンを開催しています。（1月30日（木）～2月16日（日））
- 全農Xアカウントの「食農応援」フォロー&キャンペーン投稿リポストしていただくことで、抽選で100名様に、国産大豆商品2,000円分詰め合わせが当たります。
- 「日本カーリング選手権大会 横浜2025」（2月2日(日)～2月9(日)）のブースにおいて、大豆食品の紹介をしました。



※JA全農X「大豆の日」ポスト内容



※「日本カーリング選手権大会横浜2025」ブース